１章　伊豆の国市の概要

１　自然的・地理的環境

（１）位置・面積

伊豆の国市は、伊豆半島の北部、田方平野のほぼ中央に位置しており、その面積は 94.62 ㎢。市域を南から北に流れる狩野川に沿うように国道 136 号と伊豆箱根鉄道駿豆線が走り、その周辺には市街地が形成されている。東京からは 100ｋｍ圏内にあり、自動車では、東名・新東名高速道路・伊豆縦貫自動車道・国道 136 号バイパス（伊豆中央道）を利用して約 85 分、電車では、東海道新幹線・伊豆箱根鉄道駿豆線を利用して約 80 分である。

伊豆の国市は、静岡県東部の中心地である沼津市や三島市にも近く、利便性に富んだ場所に位置している。

図 1-1　伊豆の国市の位置図

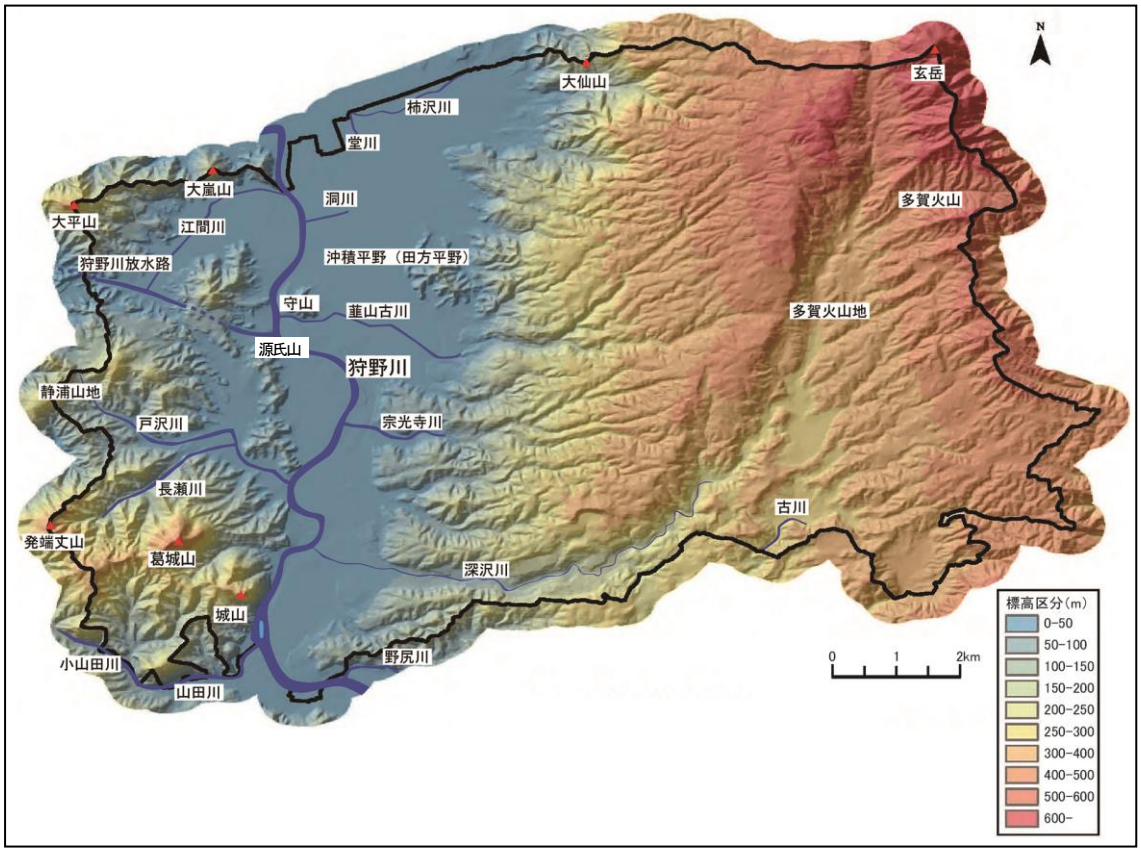
（２）地形・地質・水質

ア　地形

市域の北東端は多賀火山の最高地点である玄岳（798m）が位置し、市域の東側は、多賀火山地が連なり、600m以上の標高となっている。

一方、市域西側の標高０～50mの平地部分は市域の 1/3 程度を占め、狩野川の沖積平野の田方平野が広がっている。

また、狩野川の西側は静浦山地と呼ばれ、本市の城山（342m）まで連続した山地を形成している。狩野川東側に所在する守山は標高 100m程の独立丘を形成している。



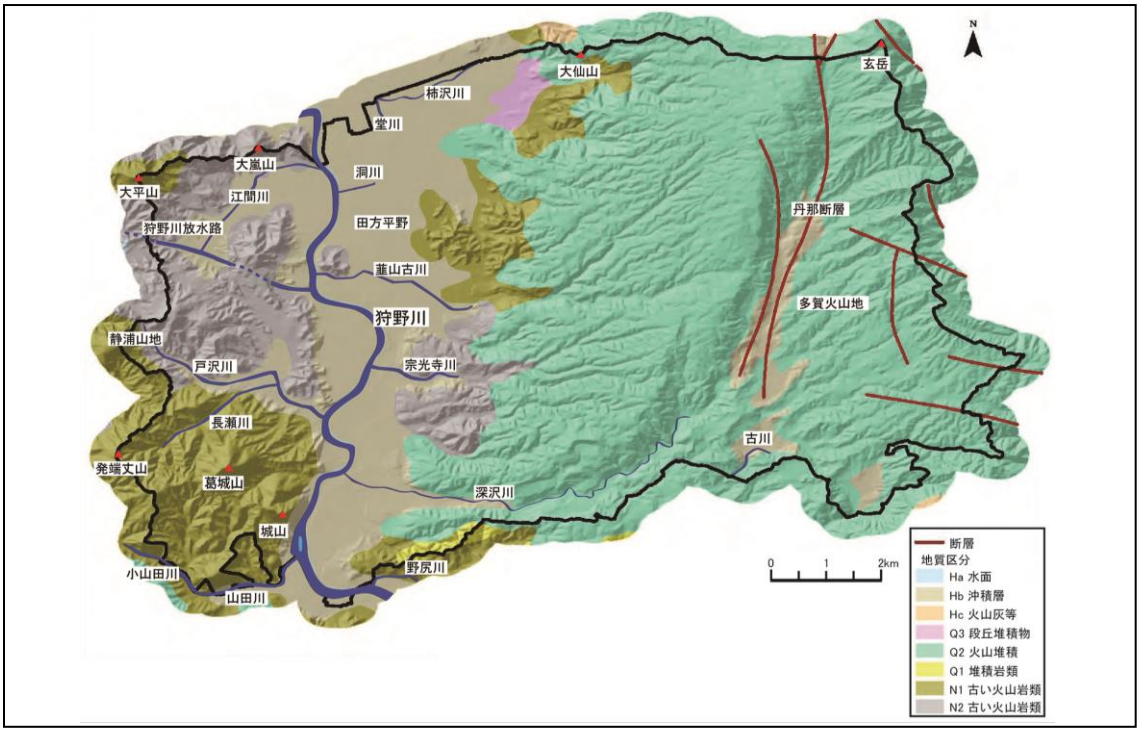
出典：国土地理院　基盤整備図情報 HP

図 1-2　伊豆の国市域の標高区分図

イ　地質

地質区分では、市域の西側の静浦山地の大半は白浜層群などの火山岩で構成され、市域の東側の多賀火山地は、中期更新統の箱根古期外輪山溶岩の火山堆積岩が多くを占めている。

また、箱根山南麓から函南町の丹那盆地を通り、本市を縦断し、南の伊豆市へ延びる 30ｋｍほどの北伊豆断層帯を代表する丹那断層が走っている。この断層により、昭和５年(1930)の北伊豆地震が引き起こされている。



出典：地質調査総合センターHP より　シームレス地質図データベース

図 1-3　伊豆の国市の市域の地質区分図

ウ　温泉

伊豆半島の地中では、太平洋プレートがフィリピン海プレートの下に潜り込んでおり、湯河原・多賀・宇佐美の３火山が存在する。フィリピン海プレートが本州にぶつかり陸化した約 60 万年前の火山活動の余熱が現在も続いており、伊豆半島北部の温泉の熱源となっている。

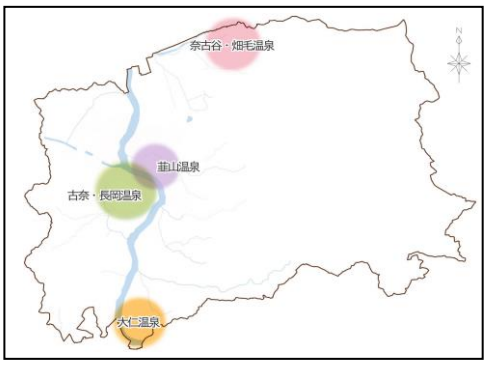


図 1-4　伊豆の国市内温泉位置図

市内においても温泉が多数湧出しており、源氏山周辺に古奈・伊豆長岡温泉、北東部の山麓地帯に奈古谷・畑毛温泉、守山周辺に韮山温泉、南部に大仁温泉が所在する。

エ　河川

伊豆の国市は、全域が一級河川狩野川水系に含まれ、洪水対策として狩野川から分岐して放水路が開削され、駿河湾に注いでいる。

狩野川は、本市の中央を流れ、大仁地区で右支川の深沢川と宗光寺川を併せ、狩野川放水路を分派した後、韮山古川、洞川などの右支川を併せて北流している。

狩野川流域は火山地帯で、火山噴出物により構成されるため、流域の多くは脆弱であり、大雨により崩壊しやすく、洪水の発生の要因となっている。

度重なる洪水により、狩野川はその流路を変えてきている。現在の河道に固定されるようになる前は、田方平野に入った後、いくたびか左右に流路を変えており、古地図や古写真で

旧河道跡を確認することができる。

表 1-1　狩野川水系の一級河川

区　分	河　川　名
狩野川	柿沢川、堂川、洞川、韮山古川、宗光寺川、戸沢川、長瀬川、深沢川、山田川、小山田川、野尻川、古川、江間川
狩野川放水路	江間川

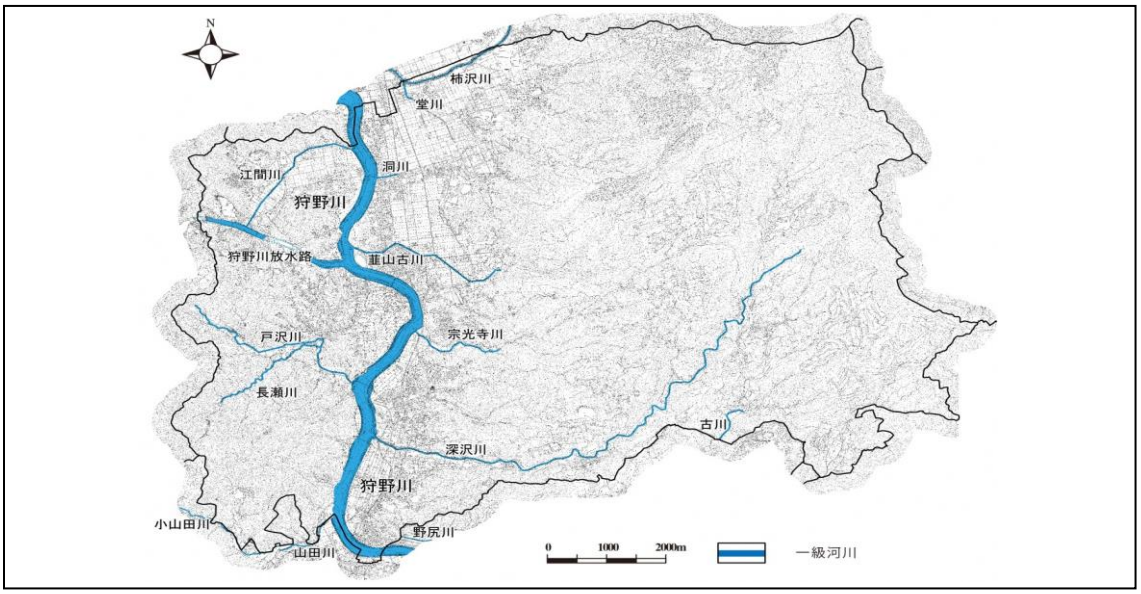
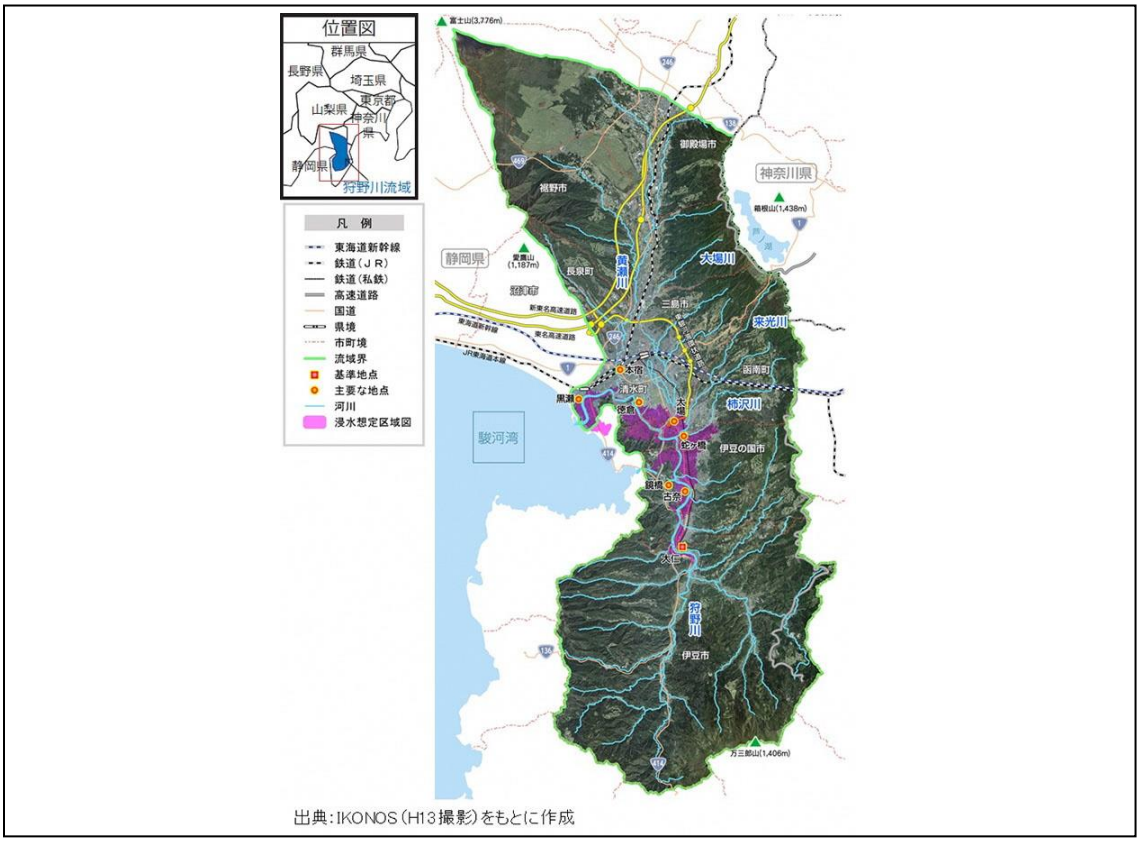


図 1-5　伊豆の国市の市域の狩野川水系の一級河川位置図



出典：国土交通省 HP より　狩野川流域図・位置図

図 1-6　狩野川流域図・位置図

狩野川大橋付近から下流側を望む（上流部：城山付近）

横山坂付近から狩野川を望む（中流部：水面に朝焼けの逆さ富士）

堰之上堤外地公園から狩野川を望む（下流部：狩野川桜公園の桜並木）

（３）生態系

ア　動物

本市では1,821種の動物（哺乳類：15種、鳥類：130種、爬虫類12種、両生類７種、魚類：35種、昆虫類：1,600種、水生生物：22種）が確認されている。確認種の多くは、静岡県内では平地から低山地にかけてみられる種である。

本市の動物相の特徴の一つとして、水質のきれいな川に生息する動物がいることがあげられる。市内を流れる狩野川とその交流では、カワセミやヤマセミ（鳥類）、カジカガエル（両生類）、アマゴやウツセミカジカ（魚類）、アオハタトンボやゲンジホタル（昆虫類）などが見られる。また、狩野川の河川敷では、カヤネズミやギンイチモンジセセリといったイネ科の草原に生息する種が見られる。

この他、市内にはクヌギやコナラの林が比較的多く、里山に生息する昆虫が見られることが特徴である。クヌギやコナラの林では、樹液にあつまるカブトムシやノコギリクワガタ、シジミチョウの仲間などが生息している。

イ　植物

本市では、1,119の植物が確認されている。本市の植生面積は約６割（61.1%）を占め、次いで耕作地（14.4%）、草地（4.2%）、水域・水辺（0.9%）、市街地等は２割（19.4%）となっている。

山地に広がる森林の大部分はスギ・ヒノキ林や竹林などの植林であり、市の北部に広がる山地の斜面、深沢川や戸沢（とさわ）川などの流域に、コナラ林などの落葉広葉樹林が分布している。また、常緑広葉樹林は人の手が加わっていないわずかな地域に分布している。さらに標高が高い場所には、アカマツ林などの常緑針葉樹林が点在している。

市内を南から北へ流れる狩野川沿いの平地には、市街地や耕作地が分布しており、河川敷や山地の伐採跡などには草地がみられる。

市の花である“すみれ”、“あやめ”、市の木である“梛（なぎ）”は、地域のシンボルとして市民に親しまれている。

すみれ

あやめ

梛（なぎ）

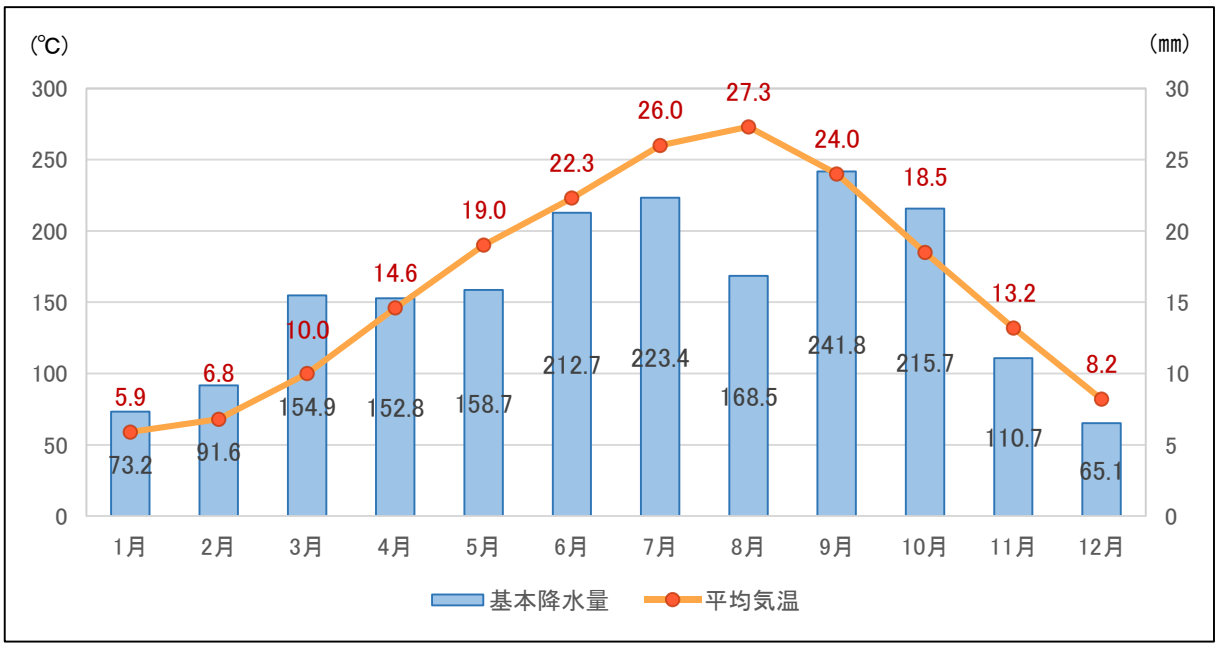
動物・植物出典：伊豆の国市都市計画マスタープラン

（4） 気象

本市の年間平均気温を平成３年（1991）から令和２年（2020）までの 30 年間の気象観測データでみると、年平均気温は 16.3℃、年間平均降水量は 1,868.2 ㎜である。

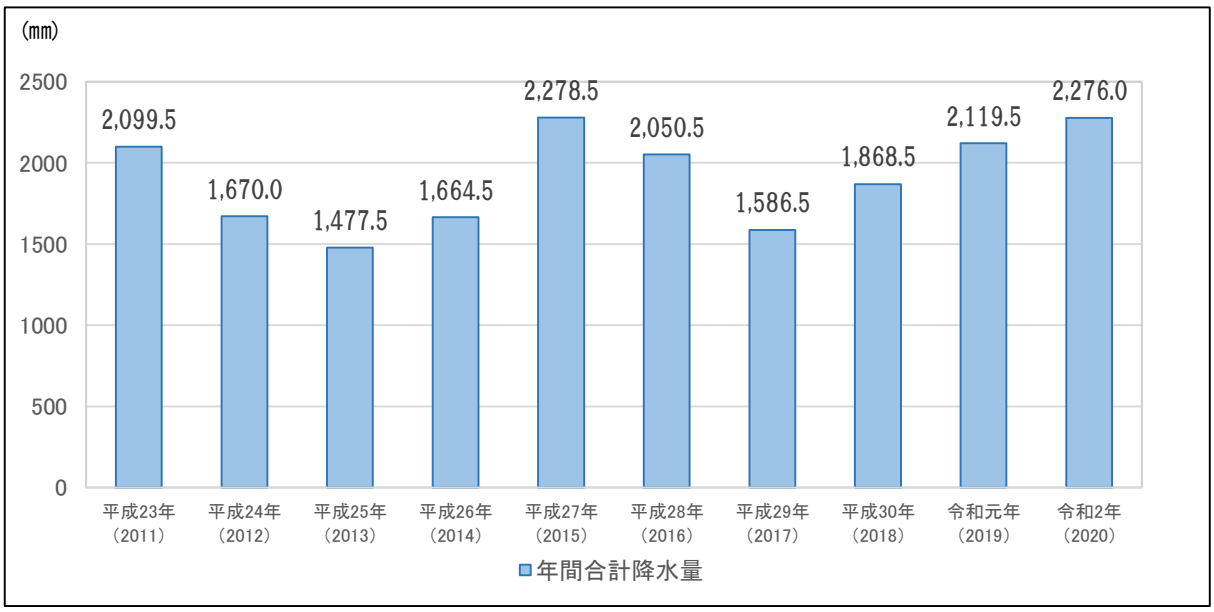
月別には、８月が最も高く 27.3℃、最低気温は１月の 5.9℃となっている。

また、平成 23 年（2011）以降の年間合計降水量は、平成 27 年（2015）が 2,278.5㎜ と最も多く、平成 25 年（2013）の 1,477.5㎜ が最も少ない。



出典：気象庁 HP（三島　平均値(年・月ごとの値) 主な要素　より抜粋）
平成３年（1991）から令和２年（2020）までの 30 年間の平均値を示す

図 1-7　月別平均気温・平均降水量



出典：気象庁 HP（三島 年ごとの値 主な要素　より抜粋）

図 1-8　年間降水量

２　社会的環境

（1） 沿革

伊豆の国市が位置する伊豆半島は、古くは「伊豆国」と呼ばれ、「和名類聚抄」(930～935 年編)によると、田方郡をはじめ、那賀、賀茂の３郡・21 郷があったとされる。

江戸時代から明治初期にかけて、現在の伊豆の国市域には 40 の村が存在した。このうち、明治 10 年(1877)に多田村・山木村・金谷村・土手和田村・滝山村の５か村が合併して韮山町となった。

明治 22 年(1889)には、７か村が合併して北狩野村、９か村が合併して田中村、韮山町と９か村が合併して韮山村、２か村が合併して江間村、８か村が合併して川西村となり、５つの村に統合された。

昭和期に入ると、昭和９年(1934)に川西村が町制を施行し伊豆長岡町、昭和 15 年(1940)に田中村が町制を施行し大仁町となる。さらに、昭和 29 年(1954)に江間村が伊豆長岡町に、昭和 34 年(1959)に北狩野村の一部が大仁町にそれぞれ編入。昭和 37 年(1962)には、韮山村が町制施行により韮山町となり、伊豆の国市の前身である３町が成立した。

平成 15 年(2003) 7 月 29 日に、伊豆長岡町・韮山町・大仁町合併協議会の設立準備会が発足し、それ以降３回の準備会が行われた。それを受けて、同年 10 月 22 日に伊豆長岡町・韮山町・大仁町合併協議会が発足し、22 回の合併協議が行われた。そして、平成 17 年(2005)に、伊豆長岡町・韮山町・大仁町の 3 町が合併し、現在の「伊豆の国市」が誕生した。

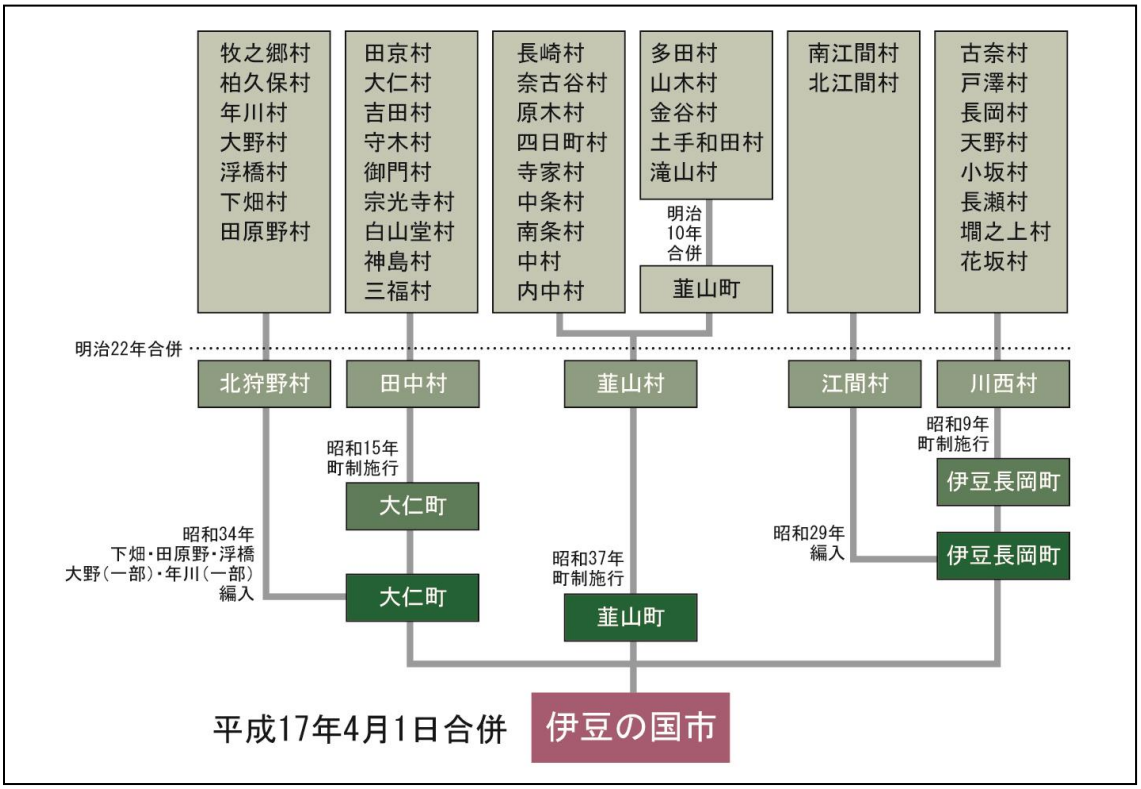


図 1-9　伊豆の国市域沿革

出典：伊豆の国市市勢要覧

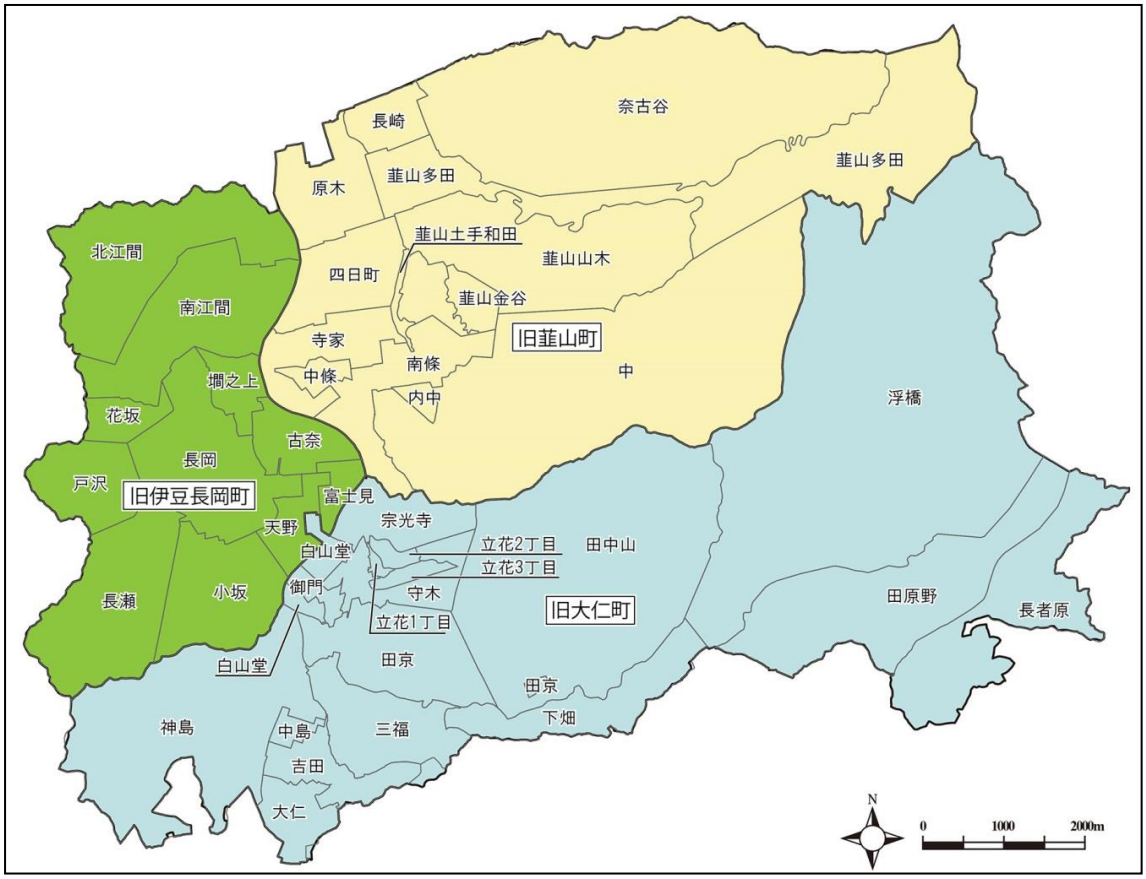


図 1-10　令和４年４月現在の行政地区区分と旧３町の範囲

（２） 人口

ア　人口の推移

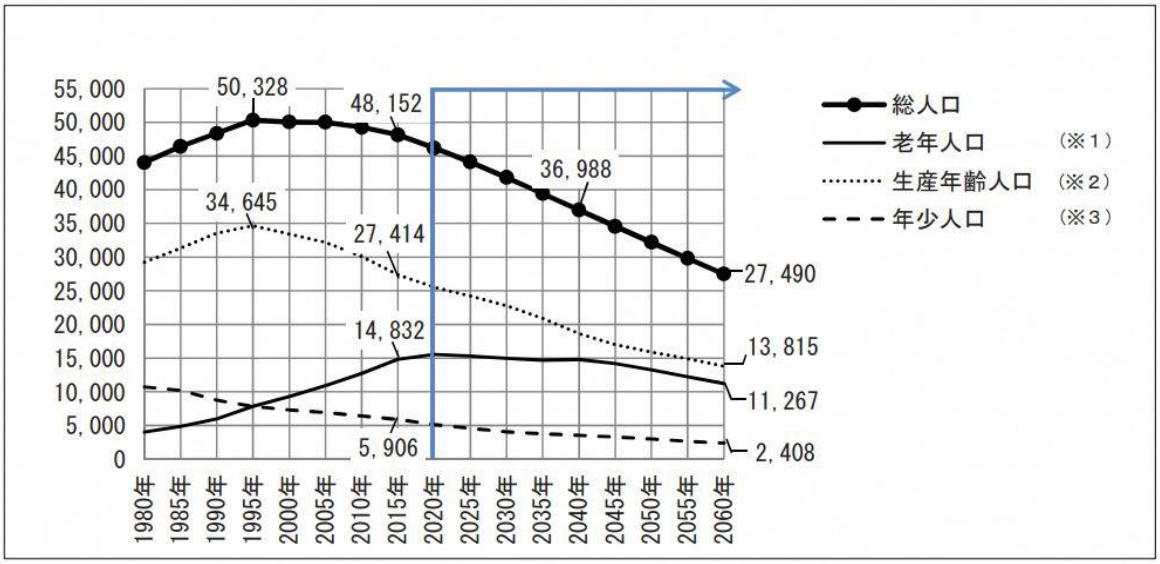
令和２年（2020）の国勢調査によると、本市の人口は46,820人、世帯数は19,062世帯である。平成７年（1995）をピークに人口は減少傾向にあり、高齢化率（総人口に占める65歳以上の人口比率）は年々上昇し、高齢化が進んでいる状況にある。

国立社会保障・人口問題研究所の平成25年（2013）３月推計値によると、今後は人口の減少スピードが加速し、令和22年（2040）には、36,988人（対2015年比で23%減）、更に令和42年（2060）には27,490人（対2015年比で43%減）と推計されている。

表1-2　伊豆の国市の人口推移表　（単位：人，世帯，%）

区分			平成７年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和２年
総人口			50,328	50,062	50,011	49,269	48,152	46,820
	内訳	伊豆長岡町	15,558	15,233				
		韮山町	19,017	19,410				
		大仁町	15,753	15,419				
世帯数			16,739	17,429	18,370	18,742	18,677	19,062
高齢化率			15.61	18.62	21.69	25.77	29.6	32.9

出典：国勢調査，伊豆の国市統計書



出典：第２次伊豆の国市総合計画

図1-11　年人口の将来推計

（３） 交通機関

ア　鉄道

本市には、三島駅から修善寺駅を結ぶ伊豆箱根鉄道駿豆線が、平野部中央の市街地を連絡する形で南北方向に走っており、市内に５駅が立地している。

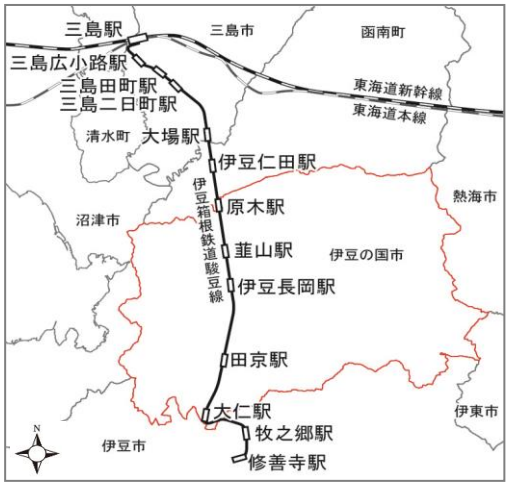


図 1-12　鉄道図

イ　道路網

道路網は、南北に流れる狩野川沿いの平坦地を中心に形成されており、市域を南北に結ぶ国道 136 号、国道 136 号バイパス（一部、伊豆中央道、修善寺道路として有料道路となっている）と、この２路線から沼津駅方面を結ぶ国道 414 号を骨格として、それを補完する県道等により形成されている。また、国道 136 号は、江戸時代は下田街道として利用されてきた。

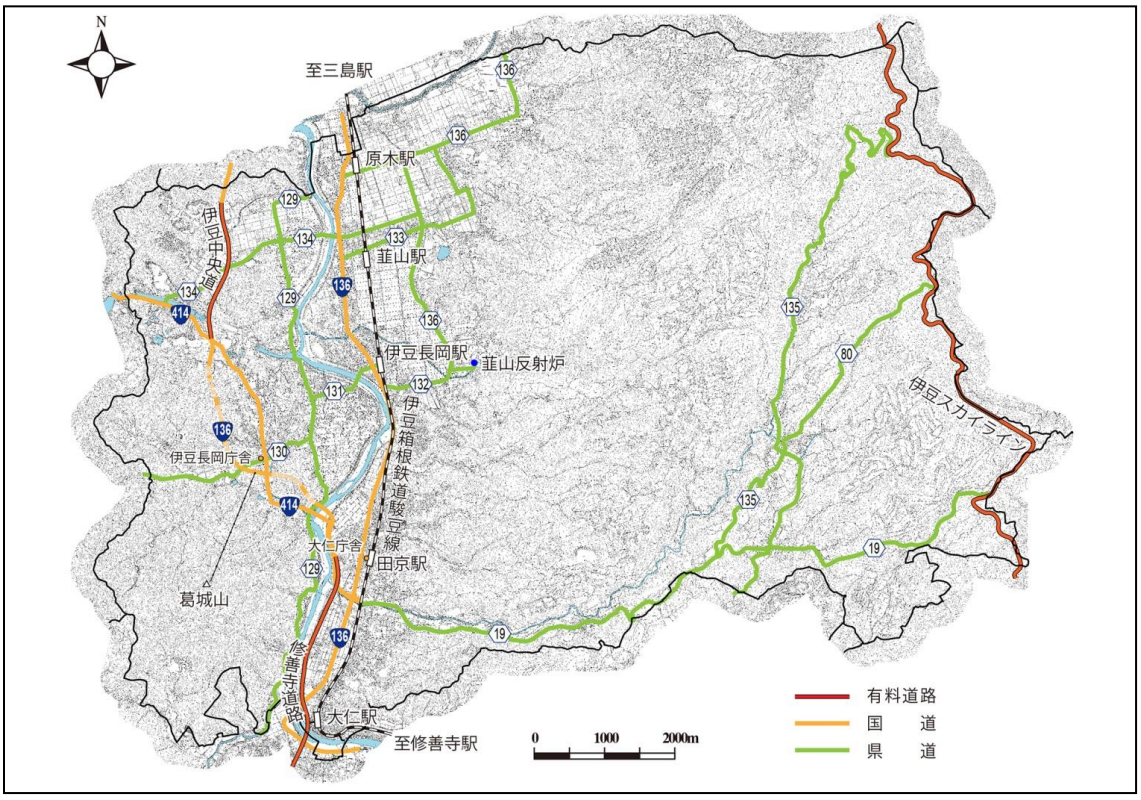


図 1-13　現況道路網図

ウ　バス

本市の平野部中央の市街地を連絡する系統と、南部を東西方向に伊豆スカイライン方面へ走っている路線があり、バス事業者は、伊豆箱根バス㈱、㈱東海バスの２事業者である。

小中学校の統廃合により通学距離が遠距離となった地域の児童・生徒の通学手段の確保や、市街地から離れた山間地等の地域住民の日常生活移動手段の確保を目的として、自主運行バスや生活支援バスが運行している。

また、韮山反射炉の世界文化遺産登録を機に、市では、観光周遊型韮山反射炉循環バス「歴（れき）バスのる～ら」を運行している。

図 1-14　歴バスのる～ら路線図

歴バスのる～ら

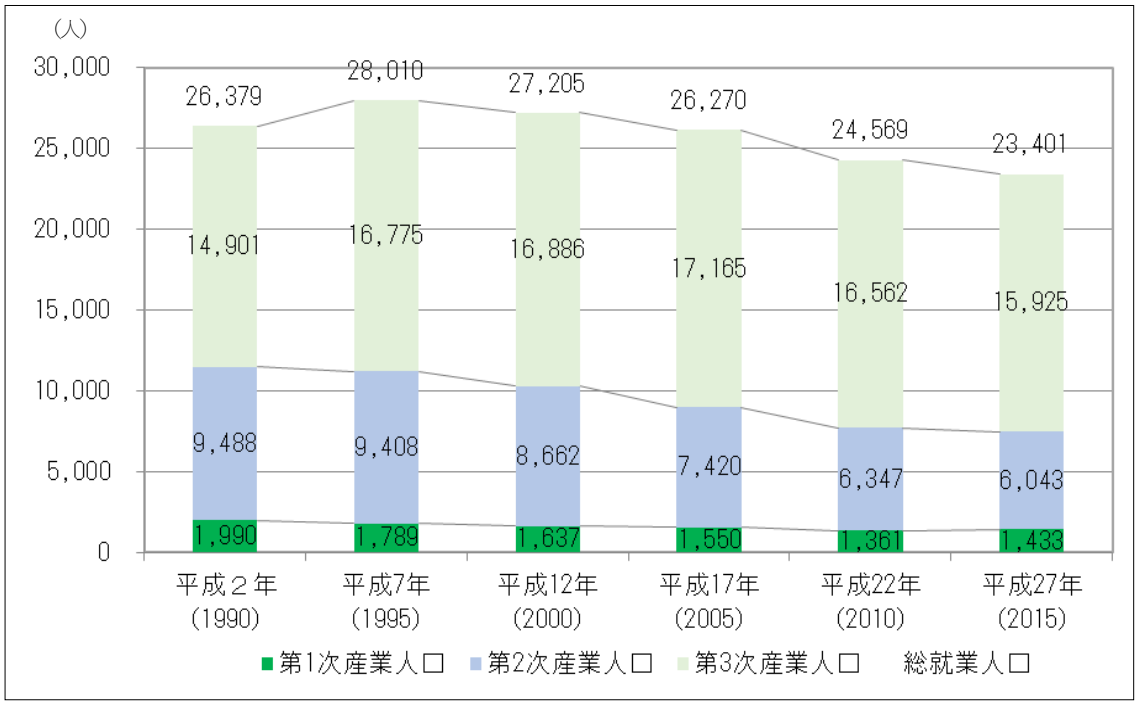
（4） 産業

本市の産業は、農業、商業、工業、観光業がバランスよく結びついている。これは、合併前の３町で、旧韮山町が第１次産業、旧大仁町が第２次産業、旧伊豆長岡町が第３次産業という産業特性であったことも大きい。

第１次産業は、主要産業の農業において、観光農園も実施しているが、就業人口は平成 27 年（2015）に微増している。

第２次産業は、旧大仁町の企業を中心とし、それを取り巻く中小企業が集積している。近年、就業人口は減少傾向にあるが、旧伊豆長岡町の伊豆中央テクノタウン（伊豆長岡工業団地）の西側を工業用地として位置付け、企業誘致による就業人口の増加を目指している。

第３次産業は、近年の観光形態の多様化によって、宿泊・サービス業の就業人口が低迷傾向にある。一方で、生活圏や行動圏の拡大で、郊外型の大型店舗の進出等もあり、平成 17 年(2005)まで増加していたが、平成 22 年（2010）以降は減少している。



出典：国勢調査　※分類不能を除く

図 1-15　産業別大分類就業人口の推移

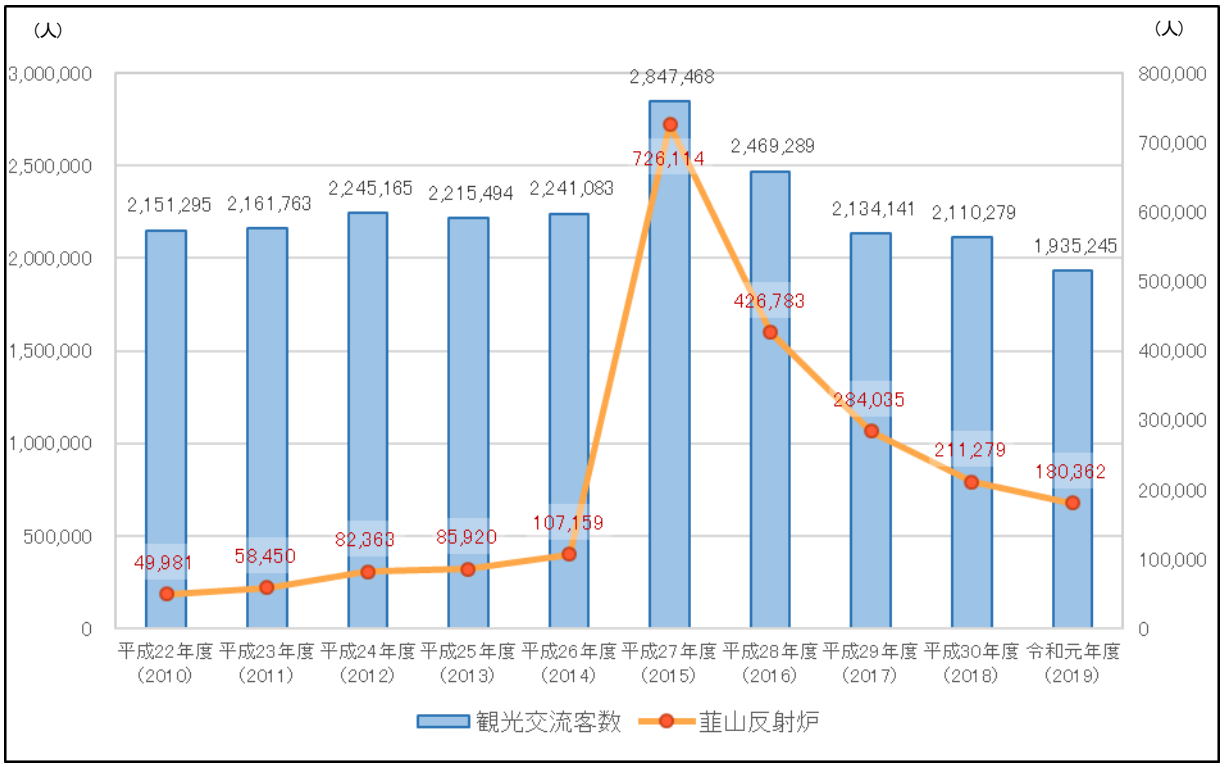
（５） 観光

本市は温泉資源が豊富で市内各地に温泉施設が多数所在しており、重要な観光資源となっている。源氏山周辺には伊豆長岡温泉、古奈温泉、北東部の山麓地帯に奈古谷温泉、畑毛温泉、守山周辺に韮山温泉、南部には大仁温泉などが集積している。

本市の産業は、古くから伊豆屈指の温泉場として知られる温泉街を中心とした温泉旅館や周辺の史跡、展望施設、狩野川のアユ釣りやサイクリング、いちご狩りやみかん狩りなどの観光と深く結びついた産業形態となっている。

本市の観光交流客数は、平成 22 年度（2010）から平成 24 年度（2012）まで増加傾向にあったが、平成 25 年度（2013）には減少に転じた。平成 27 年度（2015）には前年と比較すると約 70 万人増加したが、以降は減少傾向にある。

平成 27 年（2015）の観光交流客数の増加は、同年 7 月に韮山反射炉が世界文化遺産の構成資産として登録された効果で、韮山反射炉への来訪者数は、平成 26 年度（2014）から平成 27 年度（2015）で約 62 万人増加した。しかし、平成 28 年度（2016）以降、韮山反射炉への来訪者数は年々減少している。



出典：伊豆の国市統計

図 1-16　年間観光交流客数の推移

（６） 市内文化財施設

ア　伊豆の国市郷土資料館

平成 29 年（2017）に伊豆の国市立中央図書館２階に開館した施設で、市内の遺跡から出土した土器や石器、寄贈を受けた民具等の展示を行っている。展示室内の企画展示コーナーでは、テーマを設定し、市内の様々な文化財を紹介している。また、企画展に合わせ、ワークショップやギャラリートークなどを開催している。

伊豆の国市郷土資料館

イ　韮山反射炉ガイダンスセンター

韮山反射炉の築造に至る時代背景や経過、稼働当時の状況、現在に至るまでの保存の取組等について、建築空間を活かした迫力ある映像演出や最新の調査研究成果を反映した展示等により発信している。

韮山反射炉ガイダンスセンター

ウ　江川邸

公益財団法人江川文庫が管理・運営を行う民営施設で、重要文化財江川家住宅・韮山代官江川家関係資料、史跡韮山役所跡の他多数の文化財が所在し、一部を一般公開している。また、邸内では、江川文庫職員・周辺地域住民が年中行事を実施するなど、古くからの民俗文化の継承も行われている。

江川邸入口

エ　伊豆の国市歴史民俗資料館（旧上野家住宅）

江戸時代中頃の田方平野の農家の様式を残す県指定文化財の建造物で、内部に市所蔵の民具や農具の一部を展示し、市歴史民俗資料館として公開している。

旧上野家住宅

オ　文化財調査室（ぶんかざいちょうさしつ）

伊豆の国市野外活動センター（旧大仁東小学校校舎）を使用し、職員が埋蔵文化財の保管・整理・保存処理作業を行っている。また、博物館等への資料の貸出や、小学生を対象とした出張での体験授業等、普及及び教育への活用に関する活動も実施している。

野外活動センター

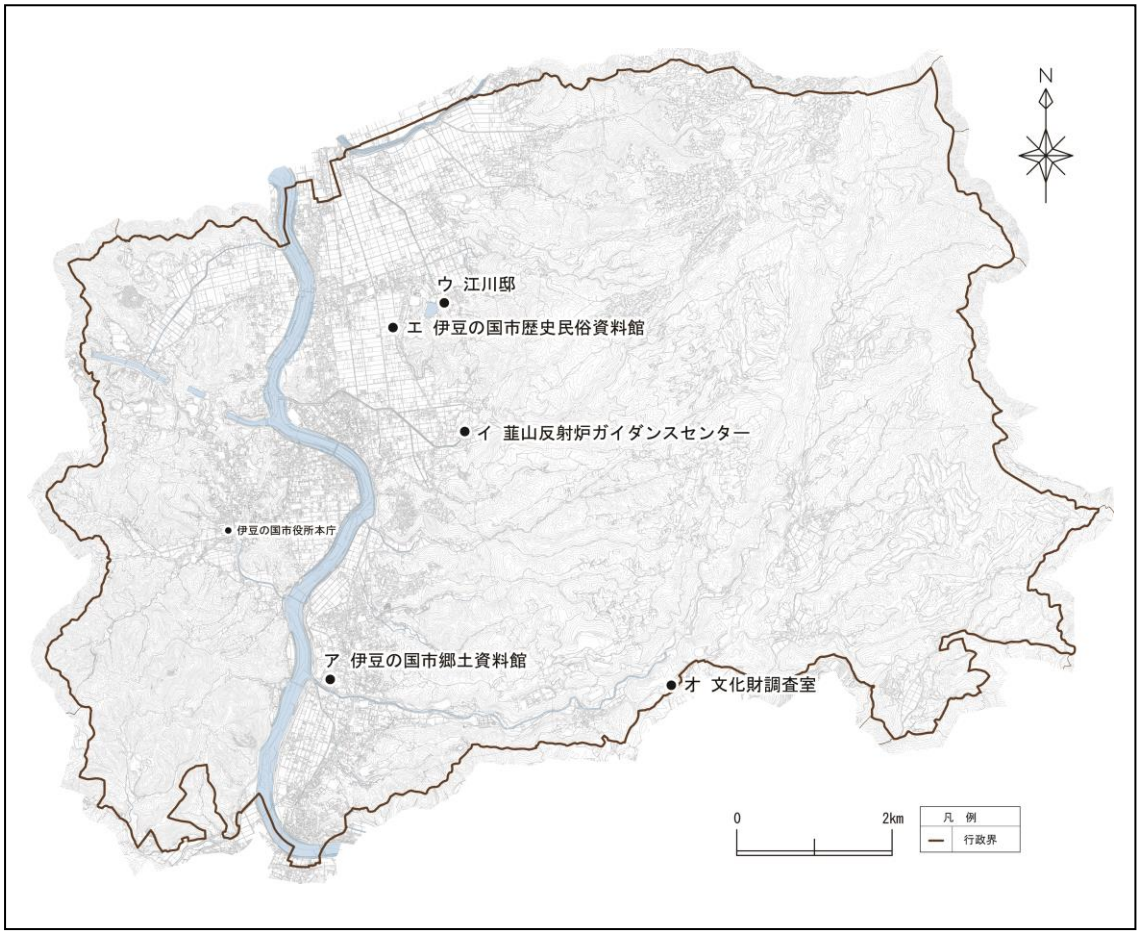


図 1-17　市内文化財施設位置図

３　歴史的環境

（1） 古代

ア　旧石器・縄文・弥生時代

伊豆の国市内の旧石器時代から縄文時代の遺跡は、市内東部の旧韮山町（以下韮山地区）や旧大仁町（以下大仁地区）の丘陵部や河岸段丘上に多く分布している。旧伊豆長岡町（以下伊豆長岡地区）においても、湯ヶ洞山遺跡で旧石器時代の遺構がみつかっている。

縄文時代になると、草創期から早期に次第に定住化の傾向がみられ、前期から中期に定住のムラをつくるようになる。旧石器時代から縄文時代への移行期である縄文時代草創期には、大仁地区の仲道A 遺跡で、全国的にも良好な当該時期の土器が多数出土しており、人々の生活の場となっていたことがわかる。また、縄文時代中期の公蔵免遺跡などでは、中部高地・関東地域の土器とともに東海西部の土器が併存しており、伊豆の国市は、両地域の文化を結ぶ位置にあったことがわかる。

弥生時代になると、主要な生活の場は水田耕作に適する、狩野川及びその支流流域などの水資源の豊富な低地部に移り、韮山地区西部や伊豆長岡地区に多くの遺跡が営まれる。韮山地区の山木遺跡では、水田跡が発見されるとともに、農具等の生産用具や生活用具として使われた多種多様な木製品が出土し、当時の生活を知る上で重要な発見となった。その出土品239 点は、国の重要有形民俗文化財として指定されている。

市内出土の土器

イ　古墳・奈良・平安時代

３世紀から４世紀、山木遺跡は、古墳時代においても、田方平野の中核的集落として存続した。そして、集落から畿内及び東海地域の遺物が多く出土することから、静岡県内でも、いち早く畿内の中央勢力との結びつきをもっていたことがわかっている。そのなかで、いわゆる豪族など支配者層が出現するが、その墳墓として５世紀から７世紀にかけて、丘陵部及び台地先端部に多くの古墳がつくられていく。このなかには、首長墓とみなされる伊豆長岡地区の駒形古墳（前方後円墳）がある。また、７世紀後半から８世紀前半には、崖面に墓室を掘削する横穴墓群が数多くつくられる。これは伊豆地域で特徴的に盛行する墳墓群であり、伊豆の国市はその中心となる地域である。

律令時代に入ると、天武９年（680）に駿河国から伊豆国が分置され、大宝令公布（701 年）の頃、田方、那賀、賀茂の３郡が分かれ、伊豆の国市は田方郡に含まれた。また、仏教が東国にも普及し、宗光寺が建立され、伊豆国分寺の瓦が市内の瓦窯で生

産された。奈良時代前半の神亀元年（724）には安房等とともに伊豆国は遠島の地となり、政争の敗者たちが流人として伊豆に送られている。また、伊豆国の国府が三島に置かれると、国府と伊豆国の南地域を結ぶ下田街道が整備される。伊豆国内の租庸調は、下田街道または狩野川を通じて国府に集められ、さらに西の都に運ばれた。

（２） 中世

ア　鎌倉時代

永暦元年（1160）、平治の乱に敗れた源義朝の子の源頼朝は韮山地区の蛭ヶ島に配流されたと伝えられ、この地の豪族北条時政の娘、政子と結ばれた。後に尼将軍と称され、日本史上に名を残す女性となる政子と頼朝の結婚が、韮山地区を中世史の幕開けの表舞台に登場させることになる。

その後頼朝は、以仁王の令旨を奉じて挙兵し、東国の源氏ゆかりの武将たちの支援を得て、鎌倉幕府を樹立した。文治５年（ 1189 ）には、 頼朝の奥州藤原氏攻めの戦勝を祈願して、鎌倉北条氏の氏寺である願成就院が建立された。

頼朝・政子の像
（蛭ヶ島公園）

頼朝亡き後は、頼家、実朝が将軍に擁立されるが、いずれも暗殺されたため、尼将軍政子と弟の義時は、京の摂関家から幼い将軍を迎え、幕府の権力は北条氏（鎌倉北条氏）が握った。承久の乱（1221 年）を経て、鎌倉北条氏の権力は絶大なものとなり、数代に渡って他の有力御家人を排除しつつ、執権として幕府の中枢を掌握した。それとともに鎌倉北条氏の本拠地である守山地域（寺家・中條・四日町）は栄え、その結果、鎌倉北条氏ゆかりの遺跡が多く残ることとなった。

イ　南北朝・室町時代

元弘３年（1333）鎌倉幕府滅亡後、北条高時の母「覚海円成（円成尼）」が、一族の子女を率いて守山の地に移り、「円成寺」を建立した。円成寺は伊豆国守護の山内上杉氏の庇護を受けた。

室町時代になっても、韮山地区は関東支配の拠点として重視された。

た。初代鎌倉公方足利基氏の補佐役であった畠山国清や関東管領を世襲する山内上杉氏が代々伊豆守護に任命された。上杉氏は奈古谷に国清寺を建立し、その一帯を伊豆の本拠地とした。これにより奈古谷周辺は三島と並ぶ伊豆の重要拠点となった。

長禄２年（1456）足利政知が韮山堀越の地に「堀越御所」を構え、堀越公方と称した。政知の死後、子の茶々丸が跡を継ぐが内紛が相次ぎ、伊豆国は内乱状態に陥った。明応２年（1493）、伊勢宗瑞（北条早雲）が堀越御所襲撃を足掛かりにして伊豆に侵攻

し、茶々丸を滅ぼして、伊豆国を平定した。

（３） 近世

ア　戦国・安土桃山時代

伊豆国を平定した伊勢宗瑞は韮山城を整備し、同城を本拠とした。これにより戦国時代の伊豆国の中心は韮山城周辺に移る。その後、小田原城を奪い、小田原北条氏５代 100 年間にわたる関東統治の基礎を築いた。２代氏綱は、名字を北条と改め、本拠地を小田原城に移すが、韮山城は伊豆支配のための支城として存続し、対今川、武田の最前線の拠点として重要視された。

天正 18 年（1590）、豊臣秀吉が小田原攻めを実行した。小田原攻めに際しては、韮山城は山中城・足柄城とともに防備を固めるが、徳川家康の勧告により開城した。小田原北条氏の敗北による韮山城・小田原城の開城は、豊臣政権の天下統一の布石となり、関東の戦国時代は終焉を迎えた。

イ　江戸時代

小田原北条氏滅亡後、伊豆は徳川家康の領国となり、家康の家臣内藤信成が韮山城に入り、韮山藩が成立した。関ヶ原合戦後の慶長６年（1601）、内藤信成は駿河に転封し、韮山城は廃城となった。

江川英長は天正 18 年（ 1590 ）豊臣秀吉による小田原北条攻めの際、徳川家康の旗本として韮山城攻めに加わった。そのことにより江川氏は、徳川家康の関東入部後は、旧領５千石余を支配する代官として存続した。また元禄期（1688～1704）には、韮山城の跡地である「御囲地」の支配を基盤として、三島代官と韮山代官を併任し、宝暦８年（1758）の三島代官廃止後は伊豆・駿河・武蔵・相模の天領を支配する韮山代官職を世襲して幕末を迎える。

市域の中央を流れる狩野川は、舟運のための船着場や、取水のための江間堰が設けられるなど水利用が進められ、江戸時代中頃には韮山地区から河口部の沼津に至る舟運が開設され、大型の川船が運航により多くの物資が行き交うようになった。また、上流部天城山麓で伐り出される材木の搬送ルートとしても使われた。

陸上交通では、江戸時代、東海道三島宿、三島大社を起点に下田に至る下田往還が通っていたが、途中、天城山が半島を南北に分断していたため整備が遅れ、往来が盛んになるのは江戸時代中期以降のこととされる。幕末、ペリーが来航し下田港が開港されると、東海道と下田を結ぶ下田街道の重要性はさらに増した。

（４） 近代

ア　幕末

幕末期に活躍した江川太郎左衛門英龍（坦庵）は、韮山代官として管轄地の民政に尽

力したほか、幕府海防政策の担当者として、韮山反射炉と品川台場の築造を行った。また、蘭学や西洋砲術の普及に努めた。安政大地震の際には、大損傷を受けたロシア軍艦ディアナ号乗組員の救出にあたるとともに、伊豆戸田で代船として建造された日本初の洋式帆船（ヘダ号）についても大きな役割を果たした。さらに、軍隊の兵糧としてパンを製作したことから、「パン祖」としても知られている。

韮山反射炉は、品川台場に配備する鉄製砲の鋳造を目的に造られた金属溶解炉で、安政４年（1857）11 月に竣工し、鉄製カノンや青銅製野戦砲の鋳造が行われた。

大國士豊画江川英龍像
（江川文庫所蔵）

イ　明治時代

明治維新にあたり、韮山代官江川英武はいち早く新政府に帰順し、旧支配地の行政機構はそのままに、伊豆国・武蔵国の一部 17 万石を管轄する韮山県が誕生した。

明治４年（1871）末の廃藩置県によって韮山県は解体され、相模国西半・伊豆国を合わせて足柄県に再編成された。初代県令柏木忠俊は明治初期に産業や教育などの様々な面で開明的政策を実施し、静岡県立韮山高等学校の基礎を作った。

明治９年（1876）、伊豆国は静岡県に編入され、足柄県は廃止となった。その後、市制・町村制施行により、明治 22 年（1889）に現伊豆の国市域の村々は江間村・川西村（伊豆長岡地区）、北狩野村・田中村（大仁地区）、韮山村（韮山地区）となり、今日に続く行政単位としてのまとまりが成立した。

明治 32 年（1899）には三島・田中村間に豆相（駿豆）鉄道が完成し、終着駅の大仁駅は、そこから馬車で修善寺・天城・中伊豆方面に向かう人々で賑わった。また、物流の集積場としても栄え、大仁駅周辺には警察署や裁判所、病院などが設置された。

「湯出づ国」が伊豆の語源になったという説があるほど温泉の多い伊豆半島でも、中世から続く古奈温泉は、明治 24 年（1891）の全国温泉番付東前頭 10 枚目に位置付けられ、修善寺、熱海に次ぐ知名度があった。伊豆長岡温泉も明治 40 年（1907）に発見され、伊豆を代表する温泉場となっている。

明治４年（1871）に「韮山反射炉保勝会」が結成され、韮山反射炉の保存運動が展開された。それを受けて、明治 41 年（1908）に陸軍省による保存修理が行われ、韮山反射炉保存への道が開かれた。

ウ　大正時代

大正 13 年（1924）駿豆鉄道が修善寺駅まで延長された。大仁地区には間宮堂（後の東芝テック大仁事業所）や東洋醸造（後の旭化成ファーマ）など、戦前戦後を通じて大規模

な事業所が立地し、工業の盛んな地域として発展した。

大正５年（1916）には「韮山村名勝旧跡保存会」が結成され、堀越御所等に石碑を建立するなど韮山地区の文化財保護の基礎となる活動が起こり、現在に至っている。

陸軍省により保存修理が行われた韮山反射炉は、大正 11 年(1922) ３月８日に国の史跡に指定され、以後数回の大規模な保存修理を経て、現在に至っている。

エ　昭和時代

昭和時代の大規模な自然災害として、昭和５年(1930)、北伊豆地震が発生し、伊豆の国市が立地する田方平野に、死者 255 人を数える甚大な被害をもたらした。この時の地震の揺れは、「地震動の擦痕（国指定天然記念物)」として魚雷の表面に記録されている。また、昭和 33 年(1958)の狩野川台風では、豪雨と狩野川の堤防決壊により、死者・行方不明者 1,269 人という記録的な被害を出した。

昭和 10 年代に入り、日本が日中戦争、太平洋戦争へと突き進む中、当市域でも戦時体制が取られ、市民にも多くの戦争犠牲者が出た。

昭和 20 年（1945）の敗戦から、戦後復興、高度成長時代にかけて、伊豆長岡地区は温泉を中心とした観光業、韮山地区は稲作やいちごの施設栽培などの農業、大仁地区は東洋醸造や東芝テックに代表される工業というように、それぞれ特徴ある発展を遂げてきた。

昭和９年(1934)に川西村が町制を施行し伊豆長岡町に、昭和 15 年(1940)に田中村が町制を施行し大仁町となる。さらに、昭和 29 年(1954)に江間村が伊豆長岡町に、昭和 34 年(1959)に北狩野村の一部が大仁町にそれぞれ編入。昭和 37 年(1962)には、韮山村が町制施行により韮山町となった。

オ　平成時代

平成 17 年（2005）４月、伊豆長岡町、大仁町、韮山町が合併し、「伊豆の国市」が誕生した。

平成 27 年(2015) ７月、日本における近代的な製鉄技術導入の黎明期を象徴するものとして、韮山反射炉が「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として、世界文化遺産に登録された。

韮山反射炉